第157回定期演奏会

PROGRAM NOTE

曲目解説
「演奏をより深く楽しむために」

中川英二郎(中川幸太郎編曲):Trisense

初演：2008年10月21日　東京(オリジナル)
　　2019年12月31日　札幌(中川幸太郎編曲オーケストラ版)

文:中川 英二郎

世界に拡散され続ける変幻自在の作品

タイトルの《トライセンス》は「Tri(3つ)」と「Sense(感覚)」を掛け合わせた造語で、楽曲全体を通して「3」がテーマとして展開されています。全3部構成、リズムの中心を3拍子が占めます。

ジャズのようにアドリブ演奏を前提にした楽譜を作ることと、クラシックのように思いの全てを譜面に書くことは作曲過程において相反する部分が多いのですが、この曲ではその2つの良さをどこかで融合できないかと思い、「ジャズのようでクラシックであり、クラシックのようでジャズである作品」に仕上げています。ジャズのようなインプロビゼーション※の展開はありませんが、いくつかのポイントで必要なエッセンスとして取り入れています。クラシックの作品に比べて、特にリズムが非常に鋭角なので、正確にそして、細分化した拍子感を重視しています。ラテンのように跳ねず、スイングはしません。第3部には高速な6拍子が続き、息継ぎの時間が限られてくるため吹奏楽器としてはテクニカルな難易度の高さも併せ持っています。

作曲家 PROFILE

中川 英二郎(トロンボーン) [1975-]
Eijiro Nakagawa

5歳でトロンボーンを始め、東京藝術大学附属高校在学中に初リーダー作をニューヨークで録音。ビッグアーティストとの共演を始め、映画、CM、TVなど多くの録音でも知られる。2018年、J.アレッシらと「SLIDE MONSTERS」を結成。19年、豪メルボルンにて「International Jazz Day」に出演。読売日本交響楽団、大阪フィルハーモニー交響楽団、東京交響楽団等と共演し、ジャンルを超えて活躍している。

作曲は2008年。オリジナルはトロンボーンとピアノのデュオのために書いたもので、初演は東京オペラシティ「B→C」(ピアノは塩谷哲氏)でした。その後、レコーディングも行ったトロンボーン+3リズム(ピアノ、ベース、ドラムス)版や、バストロンボーン／テューバ+ピアノ版、吹奏楽版などのリアレンジを続け、さまざまな編成によって演奏されるようになりました。

そのなかでも「SLIDE MONSTERS」(中川英二郎とジョゼフ・アレッシを中心に結成した世界的なトロンボーン・カルテット)のためにアレンジしたトロンボーン四重奏版は、ミュージック・ビデオがYouTube、Instagram等のソーシャル・メディアで広く拡散され、さらに今ではプロ、アマ問わず世界中のトロンボーン奏者、金管楽器奏者がこの楽曲の演奏動画をアップするようになり、トロンボーン界ではヒット作品のひとつとなりました。今回のオーケストラ版は、私の兄で作曲家の中川幸太郎がダイナミックなオーケストラ編成にアレンジしたものです。オーケストラ版の初演は札幌交響楽団(2019年)。その後、新日本フィルハーモニー交響楽団、日本フィルハーモニー交響楽団など、様々なオーケストラとの共演で演奏されています。兵庫芸術文化センター管弦楽団との共演は2022年に開催された「SUPER BRASS STARS feat. PACオーケストラ」公演。今回は定期演奏会仕様のため、特別にカデンツァ部分を拡大してお届けする予定です。

※即興演奏

楽器編成	フルート2(ピッコロ持替)、オーボエ2、クラリネット2、バスーン2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン2、バス・トロンボーン、ティンパニ、チューブラベル、カスタネット、サスペンドシンバル、小太鼓、ボンゴ、ビブラフォン、グロッケンシュピール、マリンバ、シロフォン、シェイカー、ハープ、弦楽5部

ブルックナー:交響曲 第7番 ホ長調 WAB107【ノヴァーク校訂による原典版】

初演：1884年12月30日　ライプツィヒ

文:東条 碩夫

60歳にして初めて得た栄光

優れたオルガン奏者として名声があり、ロンドンでの演奏(1871年)でも大成功を収めたブルックナーではあったが、こと交響曲に関しては、不遇の連続だった。せいぜい彼を喜ばせたことと言えば、1881年1月に、ハンス・リヒターの指揮する

ウィーン・フィルが「交響曲第４番《ロマンティック》」を初演して好評を受けた時くらいのものだったろうか。だがそうした状況が突然一変したのは、1881～83年に書いたこの「交響曲第７番」が、1884年12月30日、名指揮者アルトゥール・ニキシュの指揮するライプツィヒ・ゲヴァントハウス管弦楽団により初演された瞬間であった。それは、信じられぬほどの大成功だったのである。時にブルックナー60歳、あれほど待ちかねていた栄光を、彼はついに手に入れたのであった。

ただし、彼が本拠地としていたウィーンでは、相変わらず憂鬱な状況が続いていた ── ハンスリックという強力きわまる音楽批評家が、以前からブルックナーの交響曲を痛烈に酷評しまくっていたからである。気の毒なブルックナーは、ハンスリックを恐れるあまり、「第７番」はウィーンでは演奏しないでほしい、とウィーン・フィルへ内々に頼んだという話もあるほどなのだ。だが名指揮者ハンス・リヒターは、ウィーン・フィルを指揮して、1886年３月21日、この曲のウィーン初演を強行した。ハンスリックは相変わらず嫌味な批評を書いたが、当日の聴衆の拍手は物凄く、ブルックナーは楽章ごとにステージに呼び出されたという。彼の勝利は、もはや批評家の攻撃などを超えて、決定的になりつつあったのである。

清澄かつ雄大な曲想

第１楽章

ブルックナー得意の、弦楽器の最弱音のトレモロ（音を細かく反復して演奏する）で開始される冒頭 ── これは「ブルックナー開始」「原始霧」などと呼ばれ、「第４交響曲」および後期の３つの交響曲で活用される有名な手法である ── その上に幅広く長大な第１主題がチェロを中心に流れはじめる。この主題は、のちに第２楽章の第１主題と、第４楽章の第１主題の基ともなる重要な存在だ。

その他にも２つの主題を含みつつ、スケールの大きな起伏と跳躍とを繰り返して進むこの楽章の結びでは、実に52小節にもおよぶティンパニを含めた低音のホ音が持続され、その上に第１主題が巨大な頂点を築いて行く。ブルックナーならではの大終結である。

第２楽章

ブルックナーの交響曲における緩徐楽章の中で、「第８番」の第３楽章と並んで最高傑作に数えられるのがこの楽章である。ワーグナー・テューバ(注1)が荘重に吹き始める第１主題の陰翳に富んだ美しさ。それを受ける弦楽器群の歌も、喜びと悲しみの表情を交錯させて感動的だ。そしてしばらくのち、弦楽器群に現れる叙情的な第２主題は、ブルックナーが作曲した音楽の中でも、最も美しいものと言われている。

楽章の後半、全管弦楽の盛り上がりの中に、打楽器群が炸裂して輝かしい頂点を築く(注2)が、それは瞬時にしてワーグナー・テューバの翳りのある音色に変わり、ブルックナーが尊敬してやまなかった大作曲家ワーグナー（1883年２月13日他界）への挽歌となる。最後はホルンによる第１主題が加わり、安らぎの響きとともに遠ざかって行く。

第３楽章

交響曲の定型通りスケルツォ（諧謔）と題され、躍動的な曲想に一変する。主題はトランペットに現れるが、弦楽器群が反復するリズムと併せて、悪魔的な躍動感として聞き取れるかもしれない。

第４楽章

第１主題は、第１楽章の第１主題を、テンポを速めて躍動的に変形したものとも言えよう。楽章全体は動きに満ちて進み、終結部では第１楽章第１主題のモティーフが再現して、堂々たるクライマックスが形づくられる。

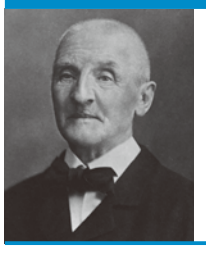
（注１）ワーグナーが自作の「ニーベルングの指環」を演奏するために考案した金管楽器。ホルン奏者が持ち替えて吹くことが多い。

（注２）第２楽章頂点における打楽器群のパートは、ブルックナーが友人や初演の指揮者のニキシュらの提言に従い追加したものだが、彼はのちにそこに「無効」という語を書き入れた。ロベルト・ハースが校訂した版はそれに基づき打楽器のパートを削除しているが、今日演奏されるレオポルト・ノヴァークが校訂した版では「その語は他人により書き入れられたもの」と見做し、その打楽器パートをそのまま生かしている。なおハース版で演奏する指揮者でも、自己の解釈に基づきこの打楽器パートのみ復活させることもある。

楽器編成　フルート2、オーボエ2、クラリネット2、バスーン2、ホルン4、ワーグナー・テューバ4、トランペット3、トロンボーン2、バス・トロンボーン、テューバ、ティンパニ、シンバル、トライアングル、弦楽５部

アントン・ブルックナー [1824–1896]
Anton Bruckner

作曲家 PROFILE



オーストリアのリンツ郊外アンスフェルデンに生れ、ウィーンで世を去った後期ロマン派の大作曲家。多くの交響曲を書き（最後の「第９番」は未完）、音楽史上最大の交響曲作家のひとりと呼ばれる。純朴な性格のためもあってか、なかなか世に認められぬ自作を友人や弟子たちの意見を取り入れてしばしば改訂したが、それが後年の研究者たちによる校訂とも相まって、ひとつの作品の楽譜に複数の「版」を生じさせる因ともなった。